

猿 橋  
小学校

# 瑛玖良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。

## いじめについて考える

校長 澁谷 一男

山間部での初雪の便りとともに、二王子岳も初冠雪を迎えた。谷間を埋める雪の花と蒼い山肌のコントラストが実に美しい。穏やかな初冬の陽光に輝くその姿は、間もなく訪れる本格的な里の冬を示唆しているようでもある。

朝の空気はいよいよ冷たさを増してきたが、明るい子どもたちの笑顔で心がほっこり温かくなる。

全国の小中高及び特別支援学校で昨年度認知したいじめの件数が、過去最多の 41 万 4 千件だったとの文科省調査の結果が報道された。この結果について文科省は、「軽微なものもいじめに含める方針が浸透し（各学校による）積極的の把握が進んだため」と分析している。認知件数の比率が全国最多と報じられた新潟市も、「いじめ認知は、教職員が児童生徒と向き合った結果」と肯定的に評価している。「いじめ認知件数が多いことは悪いことではない」という考え方は、教育界では常識になりつつある。

もちろん、いじめなどない方がいいに決まっている。が、見逃しや「軽微なもの」という予断が、重大事態を招くことになりかねない。実際、いじめの認知件数とともに、心身に大きな被害を及ぼす重大事態もいじめによる子どもの自死も増加しているのだ。

全校朝会で、子どもたちに次のことがいじめか否か問うた。

「仲間はずれや、無視をされる」「物を隠されたり、壊されたり、捨てられたりする」「ズボン下ろしなど、恥ずかしいことをされる」「軽くぶつかられたり、遊ぶ振りをして叩かれたり蹴られたりする」「悪口や文句、嫌なことを言われる」「嫌なあだ名で呼ばれる」

ほとんどの子どもが全てに手を挙げてくれた。これらの例は、されている人が「嫌だ」と感じていたら全部いじめである。そして、「言葉の暴力」もいじめになること、いじめは時として人の命も奪うこと、いじめられた側はもちろん、いじめた側や傍観者もその苦しさをずっと背負っていかねなければならないことを子どもたちに伝えた。

大切なのは、いじめと気付く「感性」であり、心の痛みが分かる「想像力」であり、相手の立場になって考える「思いやり」である。そんな豊かな心をはぐくんでいきたい。

先日行われた「絆集会」。代表児童がいじめ撲滅と命の尊さについて堂々と宣言した。

一人一人がかけがえのない存在である子どもたち。その明るい笑顔が奪われることがあってはならない。

